

柏屋町文化財調査報告書第47集

内橋柚ノ木遺跡

2019

柏屋町教育委員会

はじめに

本書は共同住宅建築に伴い、平成 29 年度（試掘調査）、平成 30 年度（本調査）に柏屋町教育委員会が実施した柏屋町内橋に所在する内橋植木遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡と同じ丘陵上では、弥生時代の銅鐵や青銅製鏡先が出土しており、金属器を所有していた有力集落の存在が想定される地域であります。また、古代においては、地域最大級規模の掘立柱建物や大宰府式鬼瓦が出土し、夷守館とみられる内橋坪見遺跡、精巧で大型の横板組井戸と貴賓専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良込田遺跡などが周間にあり、さらに大宰府と都を結ぶ官道が本遺跡と同じ丘陵上を通過していることからみましても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。しかしながら、遺跡全体のうちのわずかな範囲を調査したに過ぎず、本遺跡がどのような位置付けになるかは、今後の周辺地域の調査によって次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様に心から謝意を表します。

平成 31 年 3 月 31 日

柏屋町教育委員会

教育長 西村 久朝

目次

1 経過・位置と環境

挿図

1 調査に至る経過

1 第 1 図 内橋植木遺跡位置図 (1/25000)

1 調査体制

2 第 2 図 内橋植木遺跡周辺図 (1947 年米軍撮影の航空写真)

2 地理的環境

3 第 3 図 内橋植木遺跡全体図 (1/300)

2 歴史的環境

4 第 4 図 内橋植木遺跡平成 30 年度調査全体図 (1/100)

3 調査成果

5 第 5 図 掘立柱建物平面図 (1/40)

5 掘立柱建物

5 第 6 図 掘立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

5 ピット出土遺物

6 第 7 図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

6 その他遺構出土遺物・表採遺物

7 第 8 図 穴穴住居・包含層出土遺物実測図 (1/3)

7 おわりに

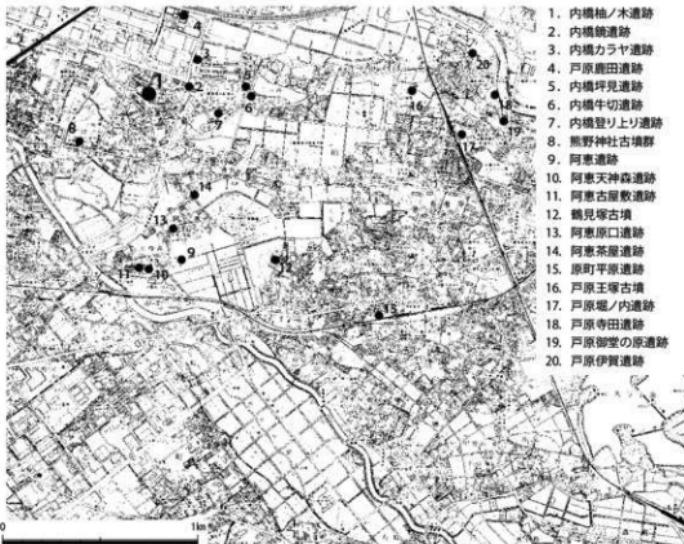
8 第 9 図 カクラン・表採出土遺物実測図 (1/3)

9 図版

発行	柏屋町教育委員会
調査起因	専用住宅建築
試掘調査	平成 29 年 10 月 12 日 平成 29 年 11 月 10 日～平成 29 年 11 月 15 日
現地調査	平成 30 年 4 月 16 日～平成 30 年 5 月 11 日
整理調査	平成 30 年 5 月 12 日～平成 31 年 3 月 31 日
使用方位	国土地理院第 II 系(世界測地系)
遺構・遺物実測、遺構・遺物撮影、製図、執筆	朝原泰介
本書に関わる遺物・記録類は、柏屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。	

経過・位置と環境

近隣には、銅鏡が出土した戸原鹿田遺跡、青銅製鋤先が出土した内橋登り上り遺跡・内橋坪見遺跡がある。内橋鏡道路では喪柏墓群が出土している。また、内橋坪見遺跡は古代官道推定線に隣接し、地域最大級規模の楕円柱建物を確認しており、夷守駅とみられる。



第1図 内橋袖ノ木遺跡位置図 (1/25000)

調査に至る経過

内橋袖ノ木遺跡は福岡県糟屋郡大字内橋字袖ノ木 585-2, 585-6において、平成 29 年 9 月 19 日に宅地造成及び専用住宅（5 棟）建築に伴う埋蔵文化財事前審査願書が MAKI HAUS 株式会社より提出されたことに起因する。当該計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋袖ノ木遺跡の近隣に位置しており、平成 29 年 10 月 12 日、平成 29 年 11 月 10 日～平成 29 年 11 月 15 日に試掘調査を実施したところ、当時の地表面下約 40cm で古代の遺構を検出した。提出された工法によると、宅地造成・専用住宅

建築では遺跡に影響を与えないことから、慎重工事の回答を伝達した。

その後、平成 30 年 3 月 15 日に専用住宅工法計画変更に伴う埋蔵文化財事前審査願書が MAKI HAUS 株式会社より提出された。協議を重ねたが、駐車場設置の切土による遺跡への破壊が免れないため、記録保存の発掘調査実施後に建築工事に着手することとなった。発掘調査は平成 30 年 4 月 16 日～平成 30 年 5 月 11 日の期間において実施した。報告書作成に係る遺物整理作業は、平成 30 年 5 月 12 日～平成 31 年 3 月 31 日で実施した。出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

また、調査にあたりましては MAKI HAUS 株式会社の皆様をはじめとして、地域住民の方々には調査の趣旨をご理解いただき、多くなご協力を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

調査体制

平成 30 年度（発掘調査・報告書作成）
調査主体 粕屋町教育委員会
教育長 西村久朝
社会教育課長 新宅信久
社会教育課文化財主幹 西垣彰博

同様主事 高橋幸作
同様嘱託職員 朝原泰介（調査・整理担当）
福島日出海、毛利須寿代

河川交通の集中する場所にある。

的調査による遺跡比定地が合致する全国的に見ても稀有な事例となる。

古代には聚落が整備され、都と大宰府を結ぶ官道が内橋坪見遺跡の横を通過している（推定）。内橋坪見遺跡は、8世紀代における精屋郡最大級規模の掘立柱建物2棟や、その建物群を囲う柵や溝が検出された。また、8世紀後半の遺物に共する大宰府式瓦瓦や赤色顔料が付着した隅切軒平瓦など多量の瓦も出土することなどから、夷守駕とみられる。

一方、日々良川中流域に目を転じると、8世紀後半の倉庫群を含む掘立柱建物群や、白磁大皿、褐彩輪水注などの官衙級の輸入陶器、「加麻又郡」のへラ書き須恵器等が出土した江辻遺跡第6地点がある。さらにも、その背後の篠栗町和田部木原遺跡には40棟の掘立柱建物群がある。これらが直ちに都衙に関連する遺跡とは考えにくいが、何らかの公権力の統制下に置かれた一群であることはいえるだろう。

また、乙犬丘陵から派生した低丘陵上に、8世紀後半頃の創建とされる駕輿丁度寺がある。伽藍配置等の遺構は不明であるが、塔心礎が出土しているため寺院跡であることは間違いない。

糸田町周辺は官道、駅家、港、都衙、寺院などがあり、古代史を考えるうえで鍵となる重要な要素をもっている地域といえるだろう。

地理的環境

福岡県糟屋郡柏原町は、福岡市の東隣接し、柏原平野の中央に位置している。町域は14.13km²と小さく平坦な地形である。

柏原平野の西は博多湾に面し、南側は太宰府市四王寺山から伸びる月隈丘陵によって福岡平野と区分される。東側の三郡山系・犬鳴山系を源とする3本の河川が坪野を貫流し、北から日々良川、須恵川、宇美川の順に博多湾に注いでいるが、山地から谷上に派生する丘陵が多く伸びているため、沖積地は河川流域に限られている。また、平野の北側には立花山系があり、博多湾に面して、周りを山地に囲まれた小さな平野である。

本遺跡は福岡市との町境に近い標高8m程の日々良川流域に位置しており、乙犬丘陵から派生する舌状低丘陵の先端南側に立地する。古代の周辺環境は、日々良川・須恵川・宇美川の合流する河口付近が、入り江状の内海を形成していたと想定されている。遺跡はこの内海に近く、博多湾と3本の河川を利用した海上・

歴史的環境

本遺跡の周辺地域は、弥生時代において青銅器生産が知られる地域であり、日々良川対岸の福岡市土井遺跡群、日々良大牟田遺跡群では青銅器鋳型が出土している。柏原町側でも、戸原鹿田遺跡で銅鏡、内橋登り上り遺跡群と内橋坪見遺跡の2か所で青銅製鋏先が出土している。古墳時代に入ると、日々良川下流域には、前期前方後円墳である戸原塚古墳や名島古墳が築造される。その後、中期には盟主墳の造営は見られなくなるが、後期になると全長80m級の前方後円墳である鶴見塚古墳が突如築造される。『日本書紀』によると、528年に磐井の亂に連坐した罪を免れるため、磐井の子葛子が糟屋屯倉を献上したとされる。

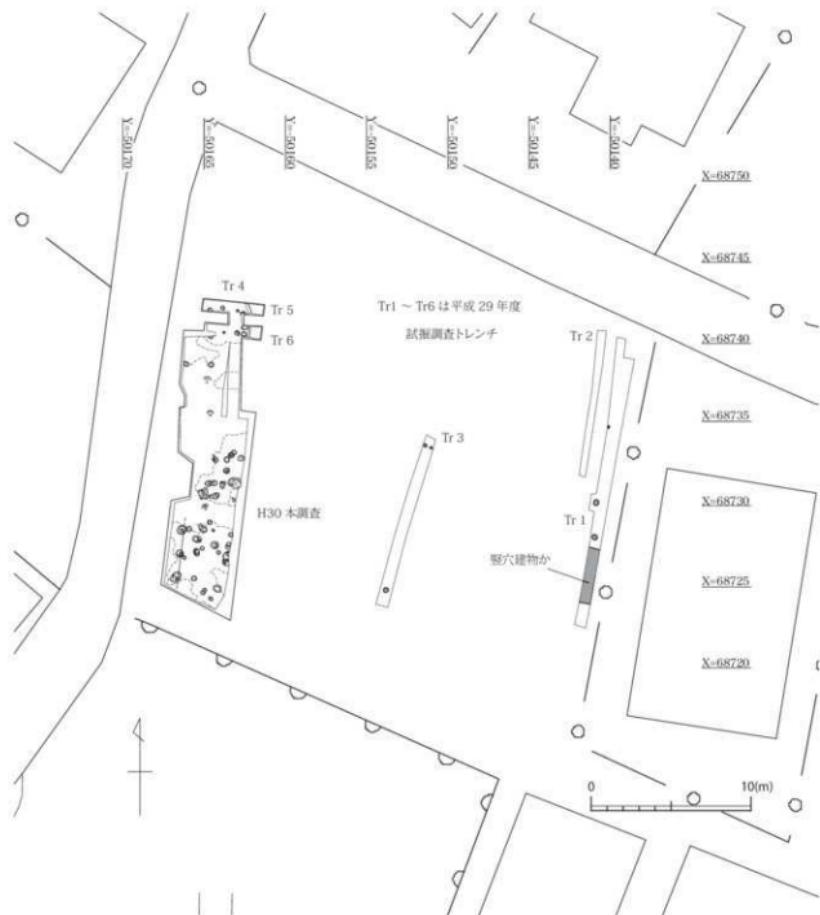
古代については、阿鹿遺跡で方平町規模の政庁跡や、櫛柱建物群からなる正倉城が発見され、7世紀後半から8世紀代の糟屋評衛・郡衙が明らかとなった。国宝京都妙心寺梵鐘は、その金石文から、698年に「糟屋評春米速広國」が铸造させたものとして知られている。糟屋評は評名が判明している数少ない評衛であり、文字資料による人物名と考古学



第2回 内橋袖ノ木道跡周辺図(1947年米軍撮影の航空写真)

調査成果

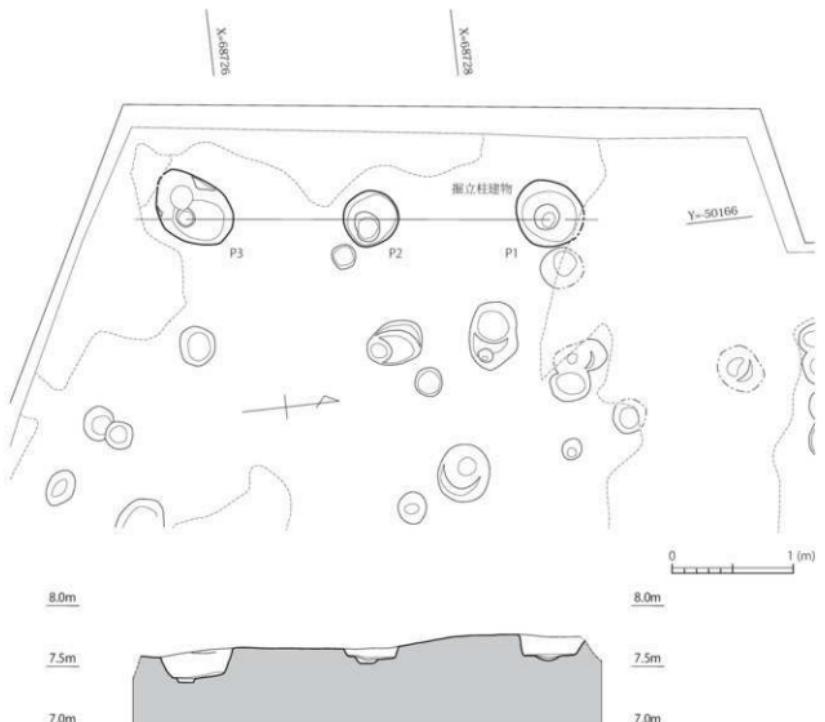
平成 29 年度に実施した試掘調査と、平成 30 年度に実施した本調査の成果を報告する。本遺跡は東西に伸びる舌状丘陵の南側に位置し、旧地形は南に傾斜している。本調査では柱立柱建物の可能性が考えられる柱穴列を検出したが、周辺をカクランにより破壊されていることや、本遺跡の南西端で検出したため、全体を確認することはできなかつた。また、試掘調査トレンチ内にも遺構を確認したが、工事の影響が及ばないため、遺構検出に留めている。



第 3 図 内構査 / 木遺跡全体図 (1/300)



第4図 内橋塗／木遺跡平成30年度調査全体図(1/100)



第5図 挖立柱建物平面図(1/40)

掘立柱建物(第5図)

本調査区南側に位置し、南北方向に並ぶ3基の柱穴を検出した。周辺がカクランで破壊されており、掘立柱建物の東妻か東側柱か判断が難しい。建物の大部分は本調査区外に位置する。柱間間隔は1.5mで柱穴の平面形は45~60cmの円形、深さ13~25cmを測る。柱列の方位はN-6.5°-Eである。

掘立柱建物出土遺物(第6図)

掘立柱建物の出土遺物は1点のみである。

1は須恵器の杯蓋で、P3から出土した。口縁部のみ残存しており、口径の復

元には至らなかった。胎土は密で焼成は良好である。外面は灰色、内面は灰白色を呈する。口縁端部は嘴状を成し、下方に折れる箇所には、明瞭な稜線がある。牛頭編年^⑩のⅧ期(8世紀前半)に相当する。



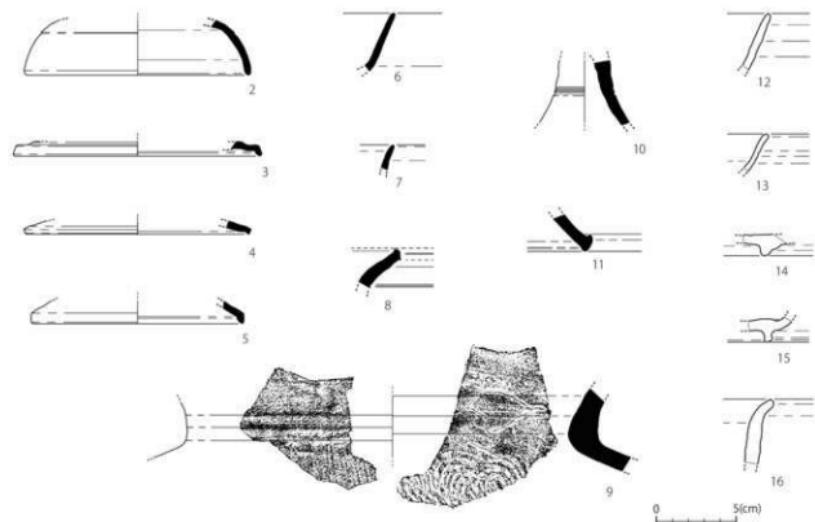
第6図 挖立柱建物出土遺物実測図(1/3)

ビット出土遺物(第7図)

本調査区では複数のビットを検出した。試掘調査トレンチにおいてもビットを検出しておらず、未調査範囲にも広がっていると思われる。

2~11は須恵器。2~5は杯蓋。2はSP5出土で、復元口径13.8cmを測る。

胎土は密であり、1~2mmの砂粒をわずかに含む。焼成は良く、外面は灰色、内面は黄灰色を呈する。外面の体部と天井部の境に段を有する。口縁端部の段は失われ、丸く收める。3はSP4出土で、復元口径15.2cmを測る。胎土は緻密、焼成は良好である。内外面ともに灰色を呈する。体部は扁平で、下方に折り曲げる嘴状口縁である。4はSP7出土で、復元口径13.7cmを測る。胎土は緻密、



第7図 ピット出土遺物実測図(1/3)

焼成は良好である。内外面ともに灰色を呈し、断面は灰褐色を呈する。口縁端部は断面三角形の喇叭状口縁である。5はSP13で出土し、復元口径12.8cmを測り、胎土は密で白色の砂粒を少量含む。焼成はやや不良で、軽く脆い。内外面ともに灰白色を呈する。口縁端部は喇叭状口縁である。牛頭編年で、2はⅢB(6世紀後半)、3~5はⅦA~ⅧB期(8世紀)に相当する。

6、7は杯身。6はSP7出土で、胎土は緻密、砂粒をわずかに含む。焼成は良好。内面は青灰色、外面は灰色を呈し、断面には薄い褐色を呈する。体部は直線的に外方へ開き、口縁部はわずかに外反する。器高は低くなるものと思われる。7はSP18から出土し、杯か皿の口縁部で、胎土は密で砂粒は含まない。焼成は不良で、軽く脆い。内外面ともに灰白色を呈する。口縁端部の少し手前でわずかに外反する。

8は壺、9は大甕。8はSP3出土の壺の口縁部で、胎土はやや粗く、焼成は良い。内外面ともに灰色を呈する。口縁部は緩やかに外反し、端部付近でわずかに内湾する。外面の端部には突堤が1条めぐり、その上部に沈線が1条めぐる。

先端部も突出するものと思われるが、磨滅が著しく不明である。9はSP20出土の大甕頭部で、復元頭部径34cmを測る。胎土は密で、2mmほどの砂粒を含み、焼成は良好。内面は灰黄色、外表面は黄灰色を呈する。頭部は内外ともに指ナデ、体部外面は縱方向のカキメ、内面は当て具痕が確認できる。

10、11は高杯の脚部。10はSP23で出土した。須恵器の高杯脚部片で、胎土は緻密。砂粒等は含まず、非常に密である。焼成は良好、内面は暗青灰色、外表面は青灰色を呈し、断面は暗赤色を呈する。11は残高2.2cmを測る。小片のため、復元は難しい。胎土は密で、焼成は良好。内外面は灰色、断面は紫灰色を呈する。内外面ともにナデ調整する。11は端部の形状から、八女古窯跡出土遺物に類似する資料があり、ⅢB期(6世紀後半)に相当する。

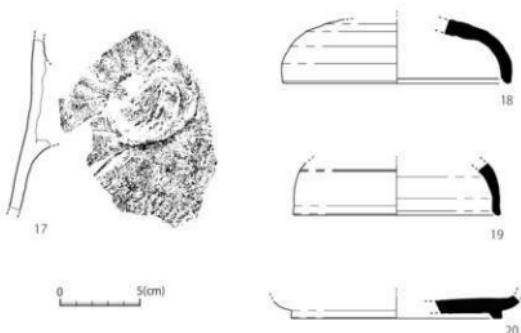
12~16は土器。12~15は杯の口縁部と高台。12はSP5出土で、残高3.5cm、胎土は細かく、砂粒もほぼない。焼成は不良で、軽く脆い。内外面ともに灰白色を呈する。13はSP18出土で、残高2.3cm、胎土は密で細かい。焼成は良好で内面は橙色、外表面には薄い褐色を

呈する。体部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で軽く外反する。口縁端部は丁寧にヨコナデされ、器厚は薄い。14はSP1出土で、胎土は軽く砂粒を少量含む。焼成はあまり。内外ともに灰白色を呈する。15はSP8出土で、胎土は密。1mm程の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、内外面ともに橙色を呈する。高台はしっかりとした方形である。内底面と体部の境には、指ナデによる段がつく。16はSP14出土のつばで、胎土は軟質で極めて軽く、焼成は不良。1~4mmの砂粒を多く含む。

その他遺構出土遺物・表探遺物

試掘調査トレーンチでは堅穴建物と思われる遺構を検出した。しかし、調査対象外であったため、検出に留めており、全容の把握には及んでいない。検出面から出土した遺物を掲載する。

また、本調査区南側において十数センチほどの包含層が確認でき、遺物が若干出土した。



第8図 穴室住居・包含層出土遺物実測図(1/3)

本調査区は全体にカクランによる道構の破壊が著しく、カクラン内にも遺物が確認できた。また、表採資料もまとめて掲載する。

穴室建物出土遺物（第8図）

17は試掘調査Tr1の竖穴建物と思われる遺構の表採資料である。大型把手付瓶で、胎土は脆く、1~2mmの砂粒を多く含む。焼成はあまり、内外ともに橙色を呈する。外面は磨滅が著しいが、わずかにタタキ痕が残る。把手の剥離面には、明顯なタタキ痕が残る。内面には当て具痕があったと思われるが、磨滅が著しく確認できない。

包含層出土遺物（第8図）

18~20は包含層出土遺物である。18は須恵器の杯蓋で、復元口径13.7cm、現高3.95cmを測る。胎土は密で、1~2mmの砂粒や4mmの小石を含み、黒色粒状の物質も含む。焼成は良好で、外面は灰色、内面は灰白色を呈する。全体的に丸みをもち、器厚は厚い。口縁部はほぼ垂直となり、内面端部に段を有する。19も須恵器の杯蓋で、復元口径12.6cm、残高3.2cmを測る。胎土は密で1~2mmの砂粒を少量含み、黒色粒状の物質をわずかに含む。焼成はやや不良で、内外ともに灰白色を呈する。外面天井部と体部の境にスリットがめぐる。20は須恵器の杯身で、底部と高台の一部である。復元口径12.8cm、高台高4mmを測る。胎土

は密で2mm以下の砂粒が少量混じる。焼成は良好で、内面は灰白色、外面及び高台は灰色を呈する。底部は平坦で、高台は低く、高台の断面は四角形に近い形を成す。内外面や高台の貼り付けは丁寧にナデ調整する。

18は口径も大きく、器高も高い。内面に端部に段を有するが、外面の天井部と体部の境にはスリットや段を持たないことから、牛頭輪のIII B期(6世紀後半)に相当する。19は口径は小さく13.0cmを下回るが、外面のスリットを有し、同じくIII B期の新相としたい。20は底部が平坦となるVII B期に相当しよう。

カクラン・表採遺物（第9図）

カクラン出土遺物や表採資料は、遺跡の年代や性格を推定する資料とはならないが、参考までに掲載する。

21~23は須恵器の杯蓋。21は復元口径13.6cm、器高4.5cmを測る。胎土は密で、1~2mmの砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は灰色、外面は青灰色、断面は褐灰色を呈する。天井部は丸く、口縁部は古相を示すようである。内面体部をヨコナデ調整し、外面は口縁部をヨコナデ、天井部を回転ハラ削りするが、天頂部には粘土が残る。22は復元口径11.9cmを測る。胎土は密で砂粒をわずかに含む。焼成は良く、内面は灰色、外表面は灰黄色を呈する。23は胎土は密で1~2mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面ともに灰色、断面の一部に暗赤色を呈する。口縁部は削形を成し、

内面ともにヨコナデを施す。

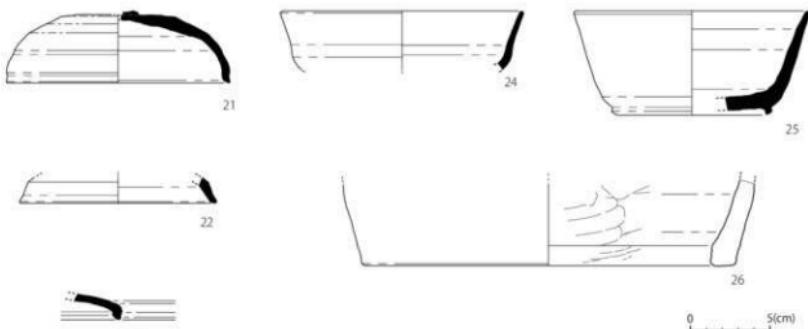
24、25は須恵器の杯身。24は復元口径14.8cmを測る。胎土は密で1~2mmの砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は灰色、外表面は暗青灰色を呈する。器高は底部、高台が欠損しており不明だが、低くなると思われる。体部と底部の境は丸くなり、体部は直線的に伸びる。25は復元口径14.4cm、器高5.4cm、高台径9.9cm、高台高5mmを測る。胎土は密で1~3mmの砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は灰色、外表面は青灰色を呈する。器高は高いが、高台は低く、高台の断面は四角形を成す。底部は平坦である。体部の立ち上がりは直線的で、口縁部はわずかに外反する。26は土器器の大型瓶の底部片である。復元底径は外径23.0cm、内径20.0cmを測る。内面端部はヘラケズリし、内面体部はナデ調整する。

21は口径や器高からIII B期(6世紀後半)、22はIV A期(6世紀末~7世紀初頭)、23は口縁端部の特徴からVII A期(8世紀前半)のものであろう。24、25はVII A期(8世紀前半)である。

おわりに

本調査は宅地造成による、約65mとういう狭小地の発掘調査であったが、掘立柱建物と思われる柱穴列を検出した。掘立柱建物は大部分が本調査区外に位置することや、周囲をカクランにより破壊されているため、全容は不明である。本遺跡の出土遺物はおおむね二時期に分けることができる。6世紀末から7世紀初頭の時期と8世紀代の時期で、掘立柱建物は後者にある。

周囲には多くの遺跡が存在し、古代の様子がみえつづる。8世紀代の周辺遺跡をみていくと、東に約500mの地点に内橋坪見遺跡²⁰がある。内橋坪見遺跡は夷守駅とみられ、8世紀代における地域最大級規模の長倉建物2棟や、その建物群を囲う柵や溝が検出されたほか、8世紀後半の遺物と共に伴する大宰府鬼瓦や、赤色顔料が付着した磨切平瓦など、多量の瓦も出土した遺跡である。その夷守駅の経営を支えた雜舎群とみられているのが、本遺跡の南東400mの地



第9図 カクラン・表探出土遺物実測図 (1/3)

点にある内橋登り上り遺跡⁽³⁾で、掘立柱建物群が検出された。内橋登り上り遺跡の掘立柱建物群は2群に大別されており、6世紀後葉前後の群と8世紀を中心とした群である。また、東北東に200mの地点には内橋鏡遺跡⁽⁴⁾があり、検出した掘立柱建物は正方位を示し、遺物等から8世紀末から9世紀初頭のものであった。さらに調査地から南南東に800mの地点には阿恵道路⁽⁵⁾がある。阿恵道路は飛鳥時代から奈良時代にかけて糟屋評（郡）を治めていた役所跡で、政庁と正倉を一体的に確認できた。古代地方官衙の様相を解明するうえで極めて重要な遺跡である。阿恵道路の正倉域では、掘立柱建物群を政庁と同じ方角のA群と、3~4°東偏するB群に大別されており、7世紀後半からA群の建物が順次建築されていく。8世紀中頃に主軸方位を正方位に向けるB群が造営されたとみられている。内橋坪見遺跡の建物群が正方位に変化するのも8世紀後半である。

この他に周辺の道路では、隣接した低地に日々良込田遺跡⁽⁶⁾がある。掘立柱建物群と多くの舶載品や、役人の存在を示す石帶が出土している。日々良込田遺

跡はその立地と多様な出土品から、大宰府の影響力が強い港の一つといえる。また、江辻遺跡第6地点については、8世紀後半の倉庫群を含む掘立柱建物群を検出し、白磁大皿、褐彩釉水注などの官衙級の輸入陶磁器が出土し、和田部木原遺跡については、40棟もの掘立柱建物群が検出された。江辻遺跡第6地点及び和田部木原遺跡周辺は、何らかの公権力の統治下に置かれていた一群と考えられる。

本遺跡で確認できた遺構や出土遺物だけでは、周辺遺跡との関連性は現時点では言及し難い。しかしながら、本遺跡周辺において、8世紀中頃以降に掘立柱建物が正方位を向くというこれまでの調査結果に照らし合わせると、何らかの影響を受けた可能性を考えることができるだろう。本調査で検出した掘立柱建物は、東妻か東側柱か判断し難いが、3基の柱穴列はN~6.5°~Eの方位であり、出土遺物からおおよそ、8世紀を想定している。前述の通り、夷守駅とみられる内橋坪見遺跡の建物群が、正方位に変化するのは8世紀後半であり、本調査の柱穴列がとる方位や出土遺物からみられる時期は、内橋坪見遺跡や内橋鏡遺跡の

世紀の掘立柱建物の傾向と整合すると言える。つまり、8世紀において、内橋坪見遺跡から西に伸びるこの丘陵上に、駅家に関連する建物群が広がっていた可能性も考えられるのではないかろうか。近年の発掘調査や試掘調査等により、丘陵周辺では8世紀代の遺構が相次いで確認されている。本遺跡北側の丘陵頂部の平坦面はもちろん、丘陵先端まで遺構の分布が広がっていることも考えられ、今後の発掘調査の進展によって、その様相が明らかになることに期待したい。

(1) 大野城市教育委員会 2008「牛領駅跡群」一括報告書 | 一大野城市文化財調査報告書第77集

(2) 納屋町教育委員会 2019「内橋坪見遺跡1次・2次」納屋町文化財調査報告書第44集

(3) 納屋町教育委員会 1994「内橋登り上り遺跡」納屋町文化財調査報告書第8集

(4) 納屋町教育委員会 2015「内橋鏡遺跡2次」納屋町文化財調査報告書第40集

(5) 納屋町教育委員会 2018「阿恵道路」納屋町文化財調査報告書第43集

(6) 福岡市教育委員会 1980「日々良込田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集

(7) 納屋町教育委員会 2002「江辻遺跡 第6地点」納屋町文化財調査第18集

図 版



調査区全景(南から)



調査区全景(南西から)



調査区全景(北西から)



掘立柱建物 完掘状況 全景(東から)



掘立柱建物 P3 完掘状況(東から)



掘立柱建物 P2 完掘状況(東から)



掘立柱建物 P1 完掘状況(東から)



試掘調査 Tr1 全景(北から)



試掘調査 Tr1 遺構検出状況(東から)



試掘調査 Tr1 全景(北から)



試掘調査 Tr2 全景(北から)



試掘調査 Tr3 全景(北から)



試掘調査 Tr4 全景(南から)



試掘調査 Tr5 全景(東から)



試掘調査 Tr6 全景(東から)



8



9



17



18



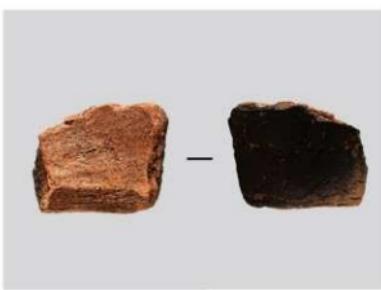
19



21



25



26

報告書抄録

ふりがな	うちはしいおのきいせき							
書名	内橋柚ノ木遺跡							
シリーズ名	柏屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編著者名	朝原泰介							
編集機関	柏屋町教育委員会							
所在地	〒811-2314 福岡県糟屋郡柏屋町若宮一丁目1番1号							
発行年月日	2019年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村						遺跡番号
内橋柚ノ木遺跡	福岡県糟屋郡柏屋町 大字内橋字柚ノ木 585-2、585-6、585-7、 585-8、585-9	403491	280240	33°37'19"	130°27'25"	2017.10.12. 2017.11.10 ~2017.11.15 2018.4.16 ~2018.5.11	約 64.9m ²	専用住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
内橋柚ノ木遺跡	集落	古墳時代～奈良時代	掘立柱建物	土師器、須恵器				
要約	多々良川下流域左岸に形成された舌状丘陵の南側緩斜面に立地し、掘立柱建物1棟を検出した。狭小地であることと、カクランによる破壊が著しいことなどから、検出した遺構は掘立柱建物のみである。本遺跡は出土遺物などから、おおよそ二つの時期に分けることができる。6世紀後半～7世紀初頭にかけての時期と、8世紀代の時期である。掘立柱建物は後者にあたり、建物の方位などから周辺遺跡との関連性がうかがわれる。							

内橋柚ノ木遺跡 柏屋町文化財調査報告書第47集

平成31年3月31日 発行

発行 柏屋町教育委員会
〒811-2314 福岡県糟屋郡柏屋町若宮一丁目1番1号（柏屋町立歴史資料館）
TEL：092-939-2984 FAX：092-938-0733

印刷・製本 株式会社 三光
〒812-0015 福岡県福岡市博多区山王一丁目14-4
TEL：092-475-6271 FAX：092-475-6274